

2019年度 FD 活動評価点検報告書

1. 中部大学の FD 活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としての FD (Faculty Development) 活動は、学長を委員長とした全学 FD・SD 委員会のもと、各学部 FD 委員会および各学科組織があり、全学体制の FD 活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会が図 1 のように組織されており、FD 活動の内容について評価できる体制が整っている。全学 FD・SD 委員会により企画・開催される FD プログラムは、大学教育を支援する職員の SD プログラムとしても機能しており、職員も教員と共に参加することで自らの職務遂行上の資質向上に役立っている。

なお、全学 FD・SD 委員会および学部 FD 委員会は、2007 年度まで本学に設置されていた FD 推進委員会および学部での FD に関する諸活動をそれぞれ 2008 年度より新しく改変した組織である。加えて、「大学設置基準等の一部を改正する省令」が 2017 年 4 月 1 日から施行され、SD (Staff Development) が義務化されたことを受けて、本学の教員・職員のキャリア形成を図る組織的な取り組みを推進するため、2019 年度に全学 FD 委員会を全学 FD・SD 委員会に再編し、その専門委員会として SD 活動 WG を新たに設置した。また、主管部署として、大学企画室高等教育推進部（教員 2 人、事務員 2 人で構成；2019 年度より大学教育研究センターから組織改編）が FD 活動の推進・支援を行っている。

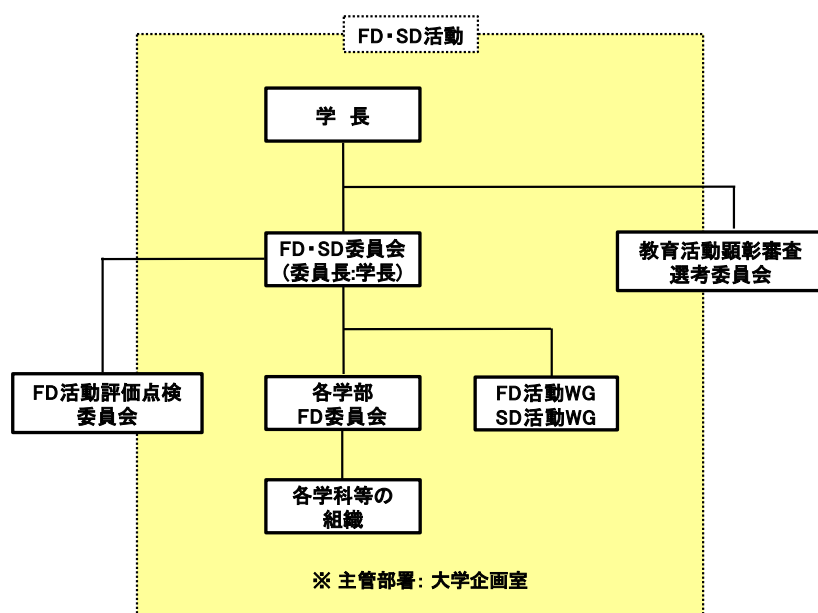


図 1 中部大学の FD・SD 活動組織図

FD・SD 委員会：本学の FD・SD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD 活動 WG：FD・SD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

SD 活動 WG：FD・SD 委員会の専門委員会として、SD 活動の全学的な推進を図る。

FD 活動評価点検委員会：本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会：教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD・SD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者のみの授業改善の活動は、「教育活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けにホームページ上で公開されている。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

目的別にみた FD 活動	対象別にみた FD 活動	形式別にみた FD 活動
1) 授業・教授法の改善	1) 全学対象	1) 会議
2) 教員の資質向上（研究交流を含む）	2) 学部・研究科対象	2) 研修会・懇談会
3) FD 活動の企画・運営など	3) 学科・教育科対象	3) 講演・報告会
カリキュラム改善	(*1) 非常勤を含む	4) ワークショップ・セミナー
組織の整備・改革	(*1) 学生を含む	5) 制度・システムなど (*2)
	授業担当者	

(*1)：対象別 1)～3) で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(*2)：授業評価システム、授業改善アンケートの制度の運用やシステムの構築、および出版などが該当

3. 2019 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として 2008 年度より 5 年間を目安とした『魅力ある授業づくり』は、2013 年度以降も重点目標とすることが 2012 年度の FD 委員会で決定され、以下の考え方をともに 2019 年度も継続して FD 活動を進めてきた。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

魅力ある授業・・・（学生にとって）興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業
 （教員にとって）学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
 授業づくり・・・（学生が目指す）自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
 （教員が目指す）授業改善、授業スキルアップ
 （学生と教員が目指す）双方向のコミュニケーション

本学では、評価点検の結果から改善を繰り返し、個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発な FD 活動を進めてきた。こうした中、教育実践現場である各学部では、以下のような FD 活動の目標設定を行い、FD 活動に積極的に取り組んだ。

(1) 工学部・工学研究科

FD 講演会、FD フォーラム、FD カフェ等に積極的に参加し、「魅力ある授業づくり」を理解し着実に実行する。

- 1) 「中部大学教育活動顕彰制度受賞者による講演会」を開催し、「魅力ある授業づくり」の一助とする。
- 2) 「魅力ある授業づくり」に相応しい話題を見つけ、工学部 FD 講演会として随時開催する。

- 3) 全学公開授業、授業サロン、FD カフェ、キャリアアッププログラムなど、学内で開催されるセミナー等への参加を強く推奨し、工学部内での情報共有を図り、各教員の「魅力ある授業づくり」の一助とする。
- 4) 「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」を積極的に活用し、授業に反映させ、「魅力ある授業づくり」に努める。
- 5) 学科専門科目担当者と共通教育科目担当者の相談会を開催し、「魅力ある授業づくり」に努める。

(2) 経営情報学部・経営情報学研究科

- 1) 夏の教育活動顕彰制度で表彰された先生方を中心に、秋学期に、表彰記念報告会を行い、全教員が情報を共有する。
- 2) 必要に応じて、専門の講師を招待して、経営情報学部主催の FD 講演会を開き、今後の FD 活動の指針とする。
- 3) 「魅力ある授業づくり」の基礎をなす「学生による授業評価」への参加を向上させる。

(3) 国際関係学部

【授業・教授法の改善】

現在、本学部が重点を置く以下の項目に関して、「実施方法の改善、留意点」などに関する情報共有を促進していく事で、本学部の「魅力ある授業づくり」に資する内容の FD 活動としていきたい。

- ・国際学科における、学生と協働して創り出していくまったく新しいスタイルの授業「ハイブリッド・プロジェクト」の実施を通じて、学生の最新の学修ニーズを確認した後、学部構成員による情報共有を推進、他の授業科目にもフィードバックすることにより、専任教員が担当する授業のより一層の質の向上を推進する。
- ・1・2年次に配当されている演習系の科目（スタートアップセミナー、国際基礎演習、国際応用演習 A、同 B）に関しては、学年・学期ごとに「コーディネーター」としてまとめ役の責任者を決め、授業の事前と事後のフォローアップを担当者全員で行い、学生の学習状況の把握に努める。
- ・「国際関係学部 Web ポートフォリオ」を一層活用する。

【学部全般の運営についての検討】

- ・国際学科としては初めての「卒業研究」への取り組みについて、旧来の3学科の長所は継承しつつ、新しい取り組みもサポートしていけるような体制作りを行う。
- ・学部の講演会、研究会、シンポジウムなどをできるだけ多く実施し、「授業外の学びの機会」を提供していくことで、学生のモチベーションの向上に努力する。

(4) 人文学部

1) FD 活動の目標

- ① 高校と大学との連携を強化し、スムーズに大学教育への移行を図る。
- ② 学生の主体性を育成するための魅力ある授業づくりの実現に向けて取り組む。
- ③ 学生と教員によるフィールドスタディを通じて春日井市を中心とした地域社会との連携を強化する。

2) FD 活動の計画

人文学部では各学科の特性を生かしつつ、複雑化する現代社会の課題に応えることのできる「確かな学力」と「コミュニケーション能力」を兼ね備えた「あてにされる人間」の育成を目標とする。学生には学内および課外活動を通じて人と積極的に関わることで多様な視点を獲得し、主体的に考え行動できる力を身に付けさせる。

- ① 各教員が学生ポートフォリオの活用をとおして日々の学習態度に関する情報を共有し、学力向上・維持に向けた意見交換を図る。併設校を中心とした高大連携の強化および各学科にて初年次教育を細やかに実践し、かつ独自のピアサポーター制度を活用することにより、恵那研修等の行事をとおして1年次から自己の将来像を意識させることに取り組む。
- ② 『魅力ある授業づくり』に関し、学生・教員の「授業評価」への参加を向上させ自己の授業改善に努める。秋学期には、教育活動顕彰制度で表彰された教員の報告会を行い、意見交換を図る。
- ③ 従来 of 講義形式と学生に能動的な学修を求める参加型学習法である双方向型授業を組み合わせた授業や学科横断的な授業に取り組むこと。学部所属教員全体に本学部および本学の FD・初年次教育関連の講演会・セミナー・研修会への積極的な参加を促す。

3) FD 活動の実践に向けて

魅力ある授業づくりとは、「学生と教員が協同して行うもの」である。学生に興味を湧かせ将来役に立つ授業および教員にとって学生の成長を実感し、常に学生から感化を受ける授業を意識しながら、学生との日頃のコミュニケーションに基づき、学生にとってわかりやすい魅力ある授業づくりを推し進め、学部全教員はそれを実現できるように FD 活動を行う。

(5) 応用生物学部・応用生物学研究科

1) 応用生物学部 FD 推進委員会

○委員会の開催

定期的に委員会を開催し、2018 年度 FD 活動の評価点検、2019 年度目標達成への活動推進、2020 年度の活動目標の設定を行うほか、必要時にはメールにて審議・連絡を行う。

○学部 FD 活動目標

ーFD 活動の見える化、共有化を目指すー

- ① 『魅力ある授業づくり』に関して、授業改善につながる学部内の報告会や意見交換会を計画する。特に、教育活動優秀賞を受賞した教員をパネラーとした討論の場を設け、授業改善に向けた情報共有を行う。
- ② 『魅力ある授業づくり』に関して、学生による授業評価、教員による授業評価、およびコメントへの回答の回収率向上を具体的目標として学部全体で継続し、取り組む。
- ③ 『魅力ある授業づくり』に関して、各教員の授業改善に関する重点目標、および授業評価コメント一覧の良かったところ、改善点等を参考とし、自己の授業改善に努める。
- ④ 学部 FD 講演会開催
多様化する学生を支えるため、学生サポートや授業改善に関する講演会や意見交換会を開催する。
- ⑤ 各教員は全学 FD 講演会その他の全学レベルの FD 支援活動に積極的に参加する。

2) 学科（専攻）、研究科等

学科会議、研究科委員会などを通して定期的に FD 情報（教務モニター、授業アンケート

など学生の意見、FD 講演会その他の内容等) の交換を行い、必要に応じ目標設定を行う。

(6) 生命健康科学部・生命健康科学研究科

- 1) 【学部】春学期中に授業検討会を行い、学部共通科目および学部専門基礎科目・学科専門科目の講義内容の紹介と基礎科目と専門科目の連携について、講義の工夫や実態・課題などの情報共有と対策に向けての意見交換を行う。
- 2) 【学部】まずは、実習科目・演習科目については可能な限りルーブリック評価の導入を目標にする。さらに今年度は講義科目・卒業研究についても導入を推進することを目標とする。
- 3) 【大学院】大学院特論等において、授業評価アンケートを実施し、その結果を担当教員で共有することにより授業改善に役立てる。
- 4) 秋学期の終了時に、学部・研究科教員全員を対象にした『魅力ある授業づくり』につながる FD 講演会（研修会）を計画する。

(7) 現代教育学部・教育学研究科

1) FD 活動の目標

① 現代教育学部

- ・現代教育学部教員の『魅力ある授業づくり』のための力量向上
- ・現代教育学部における現状と課題についての共有
- ・新しい大学教育、特にアクティブ・ラーニングに対応したカリキュラム開発の研究

② 大学院教育学研究科

- ・学部、現代教育学研究所と連携した授業改善と大学院教員の資質の向上
- ・研究交流の実施による教員組織の体制化
- ・教育モデル構築の取り組み
- ・院生への情報提供ネットワークの活性化
- ・共同研究と外部資金獲得の試み

2) FD 活動計画

① 現代教育学部

以下の講演会を実施

- ・「(仮題) 現代教育学部・教育学研究科の自己評価」
- ・「(仮題) 現代教育学部の現状と将来」
- ・「(仮題) 現代教育学部教職課程の課題と学部改編」

② 教育学研究科

以下の講演会を実施し、構成員の教育・研究活動の推進を図る。

- ・「(仮題) 教育系学部・研究科の教育・研究における倫理基準、著作権」

(8) 人間力創成総合教育センター

センター設置の理念の下、センターの FD 活動の継続的推進を図る。EP を越えた FD 活動はどのようにあるべきかについても議論し、各 EP が担当する科目の教育内容・教育理念に関して、教員間の共通理解の形成（懇談会・研修会の実施、教材提供等による）を図る。さらに魅力ある授業づくり等に向けての取り組み（授業方法の改善、学生による授業評価、教員による授業自己評価の実施率を高める等）のための学外の研修会や教育関連学会への参加等の各種方法についても検討する。

特に、教育経験の浅い教員が十分な教育経験を有する教員との交流・指導を通じた FD 活動

を展開したい。さらには各 EP 担当科目の魅力ある授業づくりのための改善（授業方法・授業内容・体制・施設・設備等の改善・充実と学外の研究会・ワークショップへの参加によるスキルアップ等）をより一層図るとともに、科目の精選に関する考察を深める。

更には、文科省中教審で計画的展開が要請されている「高大連携・接続」の一環として、本学が進めている併設高校との高大連携授業ではセンターが担当する部分が多く、関係教員との FD 活動を通じて、本学にとっても高校（生）にとっても魅力ある授業づくりを検討する。

(9) 国際人間学研究科

1) FD 活動の目標

- ① 構成員の専門分野が社会科学・人文科学に跨る多彩な学問領域であり、学生も様々な国籍・年齢層にわたるため、研究会・発表会などを通じて互いの専門分野についての理解を深め、多角的視点から専攻を超えた教育・研究指導を行える環境を育む。（新教育プログラム導入の準備ともなる）。
- ② 研究者・一般人を問わず、学外者との交流による研究・教育能力の向上を図り、また学生も巻き込むことによってともに「魅力ある授業」をつくりあげていく。
- ③ 様々な文化背景をもつ学生が所属することから、著作権・肖像権・個人情報保護等、研究倫理に関わる事項について、まず教員が正確な知識を身につけ、これらの侵害がないよう指導を徹底する。

2) FD 活動の計画

- ① 研究科の所属教員による研究報告（年 2 回）、学生とその指導教授による研究報告（年 2 回）を開催し、相互理解や交流を深める。
- ② 学外から専門家・識者等を招き、シンポジウムや講演会などの形態をとりながら、教育・研究の向上に資する知識・情報・ノウハウの吸収に努める。国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各分野、また、それらを横断的につないだ分野でのシンポジウムや講演会の実施を促進する。
- ③ 研究倫理に関わる教育の e-ラーニング教材などの研究や、論文チェック体制（場合によっては他大学のように剽窃チェックソフトを導入）についての勉強会等を実施し、研究指導へのインプットとする。

3) FD 活動の実践に向けて

従来、上記のような研究会報告会、研究発表会、シンポジウム・講演会、あるいは研究科委員会ですら参加する教員はほぼ同じ顔ぶれであり、決して多いとは言い難かった。学部生の指導や委員会活動等の業務に忙殺される状況にあって、参加したくてもできない事情があるのかもしれないが、目標達成のためには、さらに声高に呼びかけて活動への参加促進に努める。

FD 活動の重点目標である『魅力ある授業づくり』は 12 年目となる。最近、各組織の活動数も増加してきており、それに伴い、FD 活動を確実に実行するための具体的な目標が掲げられ、取り組みへの意識の高まりが見て取れる。さらに、それらの取り組みには各組織の教員構成を反映していたり、あるいは独自の行事と関連付けたりしたものも少なくなく、それぞれの特徴や個性が十分に生かされている。このように、大学が主催してきた FD 活動が確実に各組織につながり、意欲的な FD 活動の実践というかたちでしっかりと根付いたことが示されている。

4. 2019年度のFD活動の取り組み

4. 1 全学の取り組み

2019年度の全学としての取り組みは、大学企画室高等教育推進部（旧：大学教育研究センター）ホームページに詳細が掲載されている（<https://www.chubu.ac.jp/fd/>）。主な取り組みは、

(1) 教員による教育活動重点目標の設定および自己評価 (2) 授業改善の取り組み (3) FDフォーラム・講演会 (4) キャリアアッププログラム・FDに関する研修会等 (5) FDカフェ (6) 出版物 (7) 教育活動顕彰制度 (8) 中部大学『魅力ある授業づくり』プログラムの実施 (9) FD オンデマンド講義（全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラム）の提供等である。なお、これらの現状と評価を記述する。

(1) 教員活動重点目標の設定

近年の内部質保証の観点から、教育のみならず研究、社会貢献、学内行政等についてもそれぞれの活動について評価・点検の実施、改善向上が求められており、従来の教育に係る事項に重きをおいてきたが見直しを図り、「教員活動重点目標・自己評価シート」として、大学教員としての4つの責務（教育・研究・社会貢献・学内行政）についても、それぞれ自己評価を実施した。2018年度から大学設置基準上で教員と区分される助手（教育・研究の補助を主たる職務とする）も対象とし、これを機に全学部共通のレイアウトに変更となった。教員個人のFD活動を自己点検することを主な目的として全学の助教以上に提出を求めている教員活動重点目標・自己評価シートは、年度初めに、各教員が教員活動重点目標を設定し、年度末に自己評価を行っている。2019年度の目標設定者は在籍教員の該当者538人中519人、自己評価提出者は目標設定者519人中511人（未提出者8人は退職、欠勤等により提出できない者）であった。

(2) 授業改善の取り組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取り組みとして、以下の7つに取り組んできた。

① Webによる「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

2019年度、「授業評価」の学生の回答率は、春学期約31%、秋学期約24%、教員の自己評価回答率は、春学期約62%、秋学期約61%であった。2018年度の学生の回答率は、春学期約35%、秋学期約20%であったことから、通年で比較すると回答率に大きな変化はなかった。自由記述においては、春学期3,396件であり、2018年度より11.6%増加し、さらに、秋学期は2,118件であり、2018年度より26.2%大幅に増加した。秋学期の自由記述数はこの数年減少傾向にあったが、昨年度はそれ以前の水準となった。一方、『授業評価の結果に対する教員コメント』については、コメント教員数が2018年度と比較して春学期で4名増加の481名、秋学期で25名減少の472名であった。さらにコメント率は、春学期は59.2%（2018年度57.7%）で増加、秋学期は58.9%（2018年度61.6%）で減少している。

授業評価の学生の回答率については、例年同様に学科による違いが大きい点はあるが、この取り組みの学生への浸透も相まってその差は少なくなっている。学部・学科としての取り組み、認識の差がまだ認められるが、少しずつ大学全体で学生への働きかけの意識が高まってきている。

② 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供（授業改善アンケートシステム）

携帯電話やスマートフォンを活用して、授業中に教員がネット環境を使える場所であれば、学生の反応を瞬時に把握できる本学独自のクリッカーシステムである「Cumoc（キ

ューモ：Chubu University Mobile Clicker)」を導入して10年目となる。2011年7月には、利用の研修を行う目的で「CumocL」を整備し、同システムを活用して2013年4月に一般的なアンケートシステムとして学内に提供を開始した。また、2017年度より、それぞれの設問間のクロス集計が可能になるよう改善した。

なお、「授業改善アンケート（Cumocの利用を含む）」は、春学期82件、秋学期53件で合計135件（2018年度160件）の利用であった。秋学期のアンケート数については、昨年度の77件から24件減少した。

③ 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業担当者からの希望による授業ビデオ撮影支援制度の2019年度実績は10件（2018年度10件）で、授業サロンにおける授業担当者の振り返りのための撮影10件（2018年度10件）を含んでいる。

④ 授業のオープン化制度

授業担当者に申し出ること、他の教員が授業を参観できるシステムであり、後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

⑤ 全学公開授業

「全学公開授業」を2件（2018年度1件）実施し、20人（2018年度8人）の教職員の参加があった。

⑥ 授業サロン

専門が異なる学部を越えた5人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行う「授業サロン」が春学期1グループ、秋学期1グループ（2018年度、春学期1グループ、秋学期1グループ）実施され、授業の振り返り、また授業改善のヒントになる点などが意見交換された。今回で26グループとなり、延べで130人の専任教員が参加したことになる。FDネットワークの構築に繋がり、本学のFDの特徴を表す取り組みとして定着している。

⑦ CU ルーブリックライブラリ

教育の質保証を目指す上での成績評価方法の1つであるルーブリックの「蓄積」から「共有」、そして「作成支援」に繋げることを目的として、2016年3月に運用を始めた。2020年3月末までに非公開を含めて20件の登録があった。

(3) FD・SD フォーラム・講演会

①第50回FD・SD講演会「アセスメントポリシーに基づく大学教育の質的転換—高大接続と社会接続の観点から—」（講師：沖 裕貴・中部大学大学企画室 客員教授、立命館大学教育開発推進機構 教授）と②第51回FD・SD講演会「新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の情報と予防法について— 大学人として知っておきたい感染症の知識 —」（講師：伊藤守弘・中部大生命健康科学部生命医科学科 教授）の2回FD・SD講演会を開催した。

①では学修成果の評価（アセスメント）について、その目的や具体的実施方法などの方針の定め方について、高大接続と社会接続の観点から詳細な解説があった。また、②では、感染制御の専門的知識をもつ医療従事者（インфекションコントロールドクター、ICD）である伊藤教授から、新型コロナウイルス感染症をめぐる最新情報と感染予防の対策について講演があった。

各講演会には、それぞれ48人および約150人と多くの教職員が参加した。なお、2015年の講演会からは、テーマに応じて県下の大学をはじめ、他の大学にも案内を行っており、第50回FD・SD講演会の沖先生のご講演では学外から17人の参加があった。また、第51回

FD・SD 講演会の伊藤先生のご講演ではインターネットによる映像発信も行われた。

(4) キャリアアッププログラム・FD に関連する研修会等

2009 年度から開催してきた「教員キャリアアッププログラム」は、教員の授業スキルを含めた「授業改善」に関連したプログラムはもとより、「ICT(情報技術)」「学生への対応」など幅広い目的のワークショップである。教職協同のプログラムとして、職員も参加し実施してきた現状を踏まえ、2017 年度から、「キャリアアッププログラム」と名称を変更することとなった。

2019 年度は、14 回開催した。当大学企画室客員教授による「授業技術（話し方）（伝える力）」に関するプログラム（6 回）をはじめ、学外講師・学内講師を招いた「学生対応」プログラム（4 回）と「授業技術（伝える力）」プログラム（1 回）、さらに当大学企画室教員による Cumoc 活用に関する「授業運営・ICT」プログラム（1 回）およびルーブリック評価の考え方と実践に関する「授業デザイン（成績評価方法）」プログラム（2 回）を開催した。

いずれも、本学のキャリアアッププログラムのプログラムメニューとしては充実しており、形態もシステムティックに開催している。新たに大学に赴任する教員をはじめ、繰り返し開催することで非常勤講師、職員を含めた多くの教職員が体験できるプログラムとなっている。

また、毎年行われる年度初めの新任教員説明会では、学長、教務部長、学生部長、大学企画室長などから、本学の建学の精神、大学理念、本学の FD 活動等を説明している。

キャリアアッププログラムの参加者に非常勤講師が多いことも本学の特徴である。

(5) FD カフェ

FD カフェは、教職員による自由な意見交換の場である。大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している必要な知識などの実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として開催されている。2019 年度は春学期に 1 回（2018 年度は春および秋学期にそれぞれ 1 回開催）開催した。その 1 回は新任教員向けに大学内における疑問解決のための情報交換として、春学期冒頭に実施した。

(6) 出版物

『教育・研究活動に関する実態資料』及び『中部大学教育研究』を刊行している。前者は、様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として、また大学の情報公開のための基礎資料として活用されている。後者は、1979 年より刊行されてきた『教育資料』を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供するものとして、教育改善・質的向上に役立てることを目的に 2001 年から刊行している。教員の情報共有の場ともなっており、特に研究論稿は教育研究の分野でも数多く引用される実績を有している。『中部大学教育研究』No.17 から論文の投稿区分を見直し、要約・キーワード・英文タイトル等の追加、およびレイアウトの変更と、編集・投稿要項を改訂した。2019 年度は、No.19 として一般投稿 7 編を発行した。

(7) 教育活動顕彰制度

2008 年度より学部における評価項目の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、毎年前年度の教育活動について表彰しており、2018 年度の「教育活動優秀賞」は 12 人（2017 年度 10 人）、

「教育活動特別賞」は、1人（2017年度は1グループ）が受賞する結果となった。実施要項、選考総評等はホームページで公開されている。また、2017年度に、中部大学教育活動顕彰制度における教育活動優秀賞の4回目の受賞者に対して教育活動金虎賞（きんとらしょう）を制定しているが、まだ対象者は出ていない。

(8) 『魅力ある授業づくり』プログラム

すべての教員（特に教育歴の少ない教員や新たに本学に赴任する教員）が持続的に教育力の向上を目指すことを奨励し、FDプログラムへの積極的な参加を奨励するために、FD・SD委員会が主催しているFDプログラムを活用して規定の要件を満たしたものに対して、本プログラムの修了証を授与している。修了の要件については、リーフレットやホームページ上で公開されており、3年間の間に授業サロンまたは全学公開授業実施を必須としたポイント制をとっている。2019年度には3人の教員に修了証を授与した。本学の特徴あるFDプログラムへのさらなる積極的な参加を促すきっかけになることが期待される。

(9) FD オンデマンド講義（全国私立大学FD連携フォーラム実践的FDプログラム）

FD オンデマンド講義は、本学が加盟している全国私立大学FD連携フォーラムが運営している実践的FDプログラムを活用したものである。同プログラムは、毎年4月に視聴希望者を募り、教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察できる知識、技能、態度、アクティブ・ラーニングを実践する能力を修得するプログラムである。2019年度は個人18人、2組織（2018年度個人25人、1組織）が受講した。引き続き、啓発の機会として活用されることが期待される。

4. 2 学部・研究科での取り組み

各学部・各研究科においてFD活動評価点検報告書が作成されている。その報告書から、2019年度に、(1) 授業・教授法の改善に関する取り組み、および(2) 研究交流を通じた教員の資質向上の取り組みを実施した学部・研究科・学科を、その開催形式別に以下にまとめた。

(1) 授業・教授法の改善に関する取り組み

- 1) 研修会・懇談会の開催（工学部・経営情報学部・人文学部・生命健康科学部／生命健康科学研究科・現代教育学部／教育学研究科・人間力創成総合教育センター・国際人間学研究科）
- 2) 講演会・報告会の開催（工学部・人文学部・応用生物学部・現代教育学部／教育学研究科）
- 3) ワークショップ・セミナーの開催（応用生物学部・生命健康科学部／生命健康科学研究科・現代教育学部／教育学研究科・現代教育学部／教育学研究科）

(2) 研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み

- 1) 研修会・懇談会の開催（工学部・経営情報学部・人文学部・生命健康科学部／生命健康科学研究科・人間力創成総合教育センター・国際人間学研究科）
- 2) 講演会・報告会の開催（工学部・国際関係学部・人文学部・国際人間学研究科・応用生物学部・現代教育学部／教育学研究科・国際人間学研究科）
- 3) ワークショップ・セミナーの開催（工学部・生命健康科学部／生命健康科学研究科・国際人間学研究科）

このように、ほとんど全ての学部・研究科・学科が、授業・教授法の改善や、教員の資質向上の双方を目的とする FD 活動を様々な形式で実施している。本学の FD 活動が、各組織に浸透し、広く普及してきたことが示された。

4. 3 2019 年度の FD 活動の取り組みの傾向

2019 年度の本学の FD 活動件数を、目的別、対象別、および内容形式別にまとめたものが次の 3 つの表である。なお、2013 年度以降、「会議」や「打ち合わせ」は当該データから除外している。

まず、目的別にみた FD 活動の件数（表 2.1）を見ると、3 種の目的いずれについても 2018 年度とほぼ同程度の件数を維持している。特に、増加の見られた FD 活動企画・運営については、FD 関連の冊子体の製作やホームページ掲載による情報共有などの新しい形での活動が展開されたことを反映している。

次に、対象別の件数（表 2.2）については、どの対象も 2018 年度よりも一定数増加している。特に、脚注に記載したように、学生を含む活動が増加しており、学生を巻き込んだ FD 活動の基盤が形成されつつあることを示している。

最後に、形式別の件数（表 2.3）では、講演・報告会の開催件数が 2018 年度より若干減少した一方で、研修会・懇談会の件数が過去 4 年間で最大数となった。FD 活動の形式が、座学スタイルの知識の修得のみを主眼としたものから、参加者の意見交換・交流を目的とした形へと移行しつつあることを示している。本学の FD 活動内容が量的には一定レベルに達しつつある中、新たな展開として質的向上を目指した動きがあることの証左の一つと云える。

表 2.1 目的別にみた FD 活動（件数）

目的	2019 年度	2018 年度	2017 年度	2016 年度
授業・教授法の改善	69	72	66	57
教員資質向上のための研究交流	66	74	39	49
FD 活動企画・運営	26	16	16	13
	161	162	121	119

表 2.2 FD 活動の対象別にみた FD 活動（件数）

対象	2019 年度	2018 年度	2017 年度	2016 年度
全学対象	56	46	47	49
学部・研究科対象	41	39	23	23
学科・教育科対象	51	45	26	17
	148	130	96	89
* 表 2.2 のうち、非常勤講師を含む	44	51	40	39
* 表 2.2 のうち、学生を含む	53	46	21	14

表 2.3 形式別にみた FD 活動（件数）

内容形式	2019 年度	2018 年度	2017 年度	2016 年度
研修会・懇談会	47	28	21	32
講演・報告会	54	63	44	42
ワークショップ・セミナー	24	26	16	23
制度・システムなど	17	16	19	15
	142	133	100	112

※ 上記の 3 表の合計件数は、重複項目があるため、一致しない。

5. FD 活動に関する課題と今後の計画

『魅力ある授業づくり』の重点目標を掲げてから 2017 年度で 10 年が経過し、次の段階に入ってきたことが様々なデータからうかがえる。FD 活動への意識は各学部、研究科等の組織に浸透し、実際に組織で個別の活動が増えてきた。このことは、「3. 2019 年度の FD 活動の重点目標」にも表れており、記載内容がより充実し、具体性も出ており、全体的なボリュームが増えている。各組織の取り組みの充実の表れである。

昨年度の報告書において課題として掲げた「FD 活動プログラムの質向上」について、今年度は実施方法に工夫を講じることにより一定の成果が得られた。具体的には、グループワークを主体とした方式、または出張講座方式（ニーズのある組織にカスタマイズしたプログラム内容を、その関連教室に出向いて行う）を採用するなどの工夫を講じた。その結果、参加者が増加しただけでなく、事後のアンケートにおいてプログラム内容への評価も好評であったなどの効果が得られた。今後も引き続き、現場での教職員のニーズに応じた内容や切り口を採り入れつつ、企画内容を精査していくことがプログラムの「質」の向上につながっていくと考える。